

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第6号 (2001年1月1日発行)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001955

季刊 国立国語研究所 広報誌

国語研の窓



もくじ

連載		
暮らしに生きることば⑥	P1	
年頭の辞		
新しい門出に際して	P2	
刊行物紹介		
『日本語基本語彙 文献解題と研究』	P3	
『日本語教育映像教材 初級編		
『日本語でだいじょうぶ』解説書	P3	
事業の新展開		
日本語教育研修の新たな展開	P4	
終了報告		
ことばフォーラム	P5	
データベース紹介		
研究文献目録-ふたつの『年鑑』	P6	
終了報告		
データベース2000東京		
紀伊國屋書店主催セミナー	P7	
終了報告		
第8回 国際シンポジウム専門部会		
「自発音声韻律ラベリングワークショップ」	P7	
ことばQ&A	P8	
終了報告		
第8回 国際シンポジウム専門部会		
「東アジアにおける日本語国際センサス」	P8	

平成13年1月1日 第6号
 発行 国立国語研究所
 The National Language Research Institute
 編集 国立国語研究所企画広報委員会
 〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
 電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530
 URL <http://www.kokken.go.jp/>



第8回 国立国語研究所国際シンポジウム専門部会「自発音声韻律ラベリングワークショップ」
 平成12年11月14日・15日 国立国語研究所

連載第6回

暮らしに生きることば

一昨年(2010年)の正月に『けろりの道頓』という歴史ドラマがフジテレビで放映されました。私財をなげうって大阪の道頓堀川を造った河内の豪族・安井道頓の一生を描いた作品です。

西田敏行扮する道頓のセリフにこんなものがありました。地面にひれ伏し、道頓堀川の造成について役人から許可の通告を聞いた道頓が、それを受けて「しかと承りました」と答えたのです。これを聞いたとき「適切なことばがあるものだなあ」と感心しました。とりわけ「しかと」の部分に感動しました。

今でしたらこんな時何と言うのでしょうか。「確かに～」では受け止め方がまだ緩いような感じがします。後半の「承りました」の部分はどうでしょう。「分かりました」ではずいぶん軽い感じがしますし、直前の「確かに」との繋がりもやや不自然です。「了解しました」とすれば受け止めの確実度は増しますが、タクシーの無線や電子メールではふさわしいでしょうが、この場面にはちょっとそぐわない感じがします。ここはやはり、「しかと承りました」しかなさそうです。

社会階層による使用の片寄りがあったでしょうが、昔前はこんな適切なことばが、暮らしに生きることばとして普通に使われていたのです。現代の日本語に伝承されなかったのが非常に惜しい気がします。

いよいよ新しい世紀に入りましたが、文化として「しかと」伝えるべきことば、「しかと」受け継ぐべきことばというのが、いろいろとありそうです。

年頭の辞

新しい門出に際して

国立国語研究所長 甲斐 睦朗



新年明けましておめでとうございます。
国立国語研究所を代表して21世紀最初の初春のごあいさつを申し上げます。

御存じのように国立国語研究所はこの4月から「独立行政法人 国立国語研究所」として新しく生まれ変わることになります。この再生あるいは移行によって何がどのように違って来るかについてはまだ不明確な所があります。しかし、私どもの心がまえは確固としております。すなわち、日本語の環境は、国際化や国民の生活スタイルの変化などによって年々違いを見せています。そこで、創立から半世紀余りの間に築かれてきた伝統を継承しながら、新しい時代に応じた日本語研究の在り方を追究していく所存です。また、国民の皆様がお寄せくださる篤い御期待にはぜひお応えしたいと考えております。

この2年余り、私どもは独立行政法人化に対処するために、創立以来の軌跡を検討し、新しい研究体制の検討に取り組んできました。幸いにも、関係機関の助力、全職員の気持ちのよい協力があって日本語研究の新しい取り組み方を確立することができました。ここでは、新しい国立国語研究所の在り方を、国民への普及・広報に絞って述べることにします。

私どもは、この2年間、電話による言葉相談の体制を設けて、全員が交代で応じるようにしてきました。ちょっとした言葉の質問によって研究員の問題意識が呼び起こされることもあります。この電話相談は、今後の積極的な展開を検討しています。次に、昨年より地域の方々を対象とした「ことばフォーラム」という催しを開いてきました。これは、研究員が言葉について、常々研究し、考えていることを、講演会やワークショップなどの形で一般の方々にわかりやすく伝えていこうとするものです。今後は、この「ことばフォーラム」の回数を増やすとともに会場を全国に広げることを計画しています。また、研究成果をわかりやすく解説した普及書や日常の言葉遣いに関する啓発書を刊行したり、ビデオ作品を編集したりして、国民の言語生活の向上に役立てたいと思っています。

新しい国立国語研究所は、日本語研究、日本語教育における世界の中核的機関としての役割を果たすことは当然として、言語生活上の問題解決に役立つ研究に取り組み、その成果を積極的に国民に発信していく所存です。どうぞ、これまでに増す御支援・御指導をお願いして、新年のごあいさつといたします。

刊行物紹介

『日本語基本語彙 文献解題と研究』

『日本語教育映像教材 初級編 「日本語でだいじょうぶ」 解説書』

『日本語基本語彙 文献解題と研究』 国立国語研究所報告 116 B5判 340ページ

基本語彙は、教育や調査などを行う上で元になる言葉の集まりという意味で、国語教育、日本語教育、言語調査などの上で取り上げられています。この報告書は、日本で刊行された日本語の基本語彙の文献約200編から、愛児の語彙発達を6年間調査した『幼児の言語の発達』(1924)のように歴史的に貴重である文献、『教育基本語彙』(1958)のようによく活用されてきた文献、『日本語教育のための基本語彙調査』(1984)のようにこれからの基本語彙の選定に大切な文献、という見方で約120編を選定してその特徴を解説しています。たとえば、最初の文献は、今から80年前の大正8年に成城小学校が新入学児童の理解語彙を調査した『児童語彙の研究』で、児童全員が理解できた言葉として、約2,000語が掲げられています。

この報告書は、これらの文献に基づいて、日本の語彙調査がどのように開発され、どのように展開してきたかについてほぼ10年単位で説明しています。また、どういう立場や方法で調査が行われているかについても14種に分けて考察しています。

今後は、この報告書の指摘によって、新しい調査研究が開発され、また、データベースの作成が行われることが期待できます。

○『日本語基本語彙 文献解題と研究』 国立国語研究所報告 116 9,800円 明治書院



『日本語教育映像教材 初級編 「日本語でだいじょうぶ」 解説書』 B5判 112ページ

国立国語研究所日本語教育センターでは、外国人に対する日本語教育に役立てるため、1993年度から1997年度にかけて、ビデオ教材『日本語教育映像教材 初級編 「日本語でだいじょうぶ」』を作成しました。さらに、このビデオ教材本体を有効に利用するための関連教材として、これまでに『シナリオ集』(1996)と『語彙表』(1997)が刊行されています。

今回紹介する『日本語教育映像教材 初級編 「日本語でだいじょうぶ」 解説書』は、関連教材シリーズの最新刊として、2000年3月に発行したものです。この『解説書』には、映像に現れた伝達行動、事物、各場面で展開する談話構造などの記述が収められています。

伝達行動に関しては、談話の骨格をなす発話に対して、その発話が談話中で担う役割(「単位方略(タクティクス)」の種別)が付与してあります。たとえば、「○○さん、いらっしゃいますか」という発話でも、いるかいないかを尋ねているのであれば「情報提供の要求」、呼んでほしいという意図を含んでいれば「行為の依頼」というように、表現は同じものでもそれぞれの談話中での役割に応じた情報が付与されています。

また、映像教材の場合には、登場人物が手にしているもの、背景に見えているものなど、さまざまな周辺的な事物が目に入ります。それらの非言語的な情報からは、ときには日本文化の一端をかいま見することもでき、日本文化紹介の糸口として活用することも可能です。

『初級編』を利用して日本語を指導する方々に、ぜひ活用していただきたいと思います。

○『日本語教育映像教材 初級編 「日本語でだいじょうぶ」 解説書』 1,890円

○その他の関連教材

『日本語教育映像教材 初級編 「日本語でだいじょうぶ」 シナリオ集』 1,800円

『日本語教育映像教材 初級編 「日本語でだいじょうぶ」 語彙表』 2,000円

○ビデオ教材本体

『日本語教育映像教材 初級編 「日本語でだいじょうぶ」』 全4ユニット(40セグメント) 152,000円(ビデオ版)

* 上記の発売元はすべて 日本シネセル(株)

また、日本語教育教材開発室では、このビデオ教材を利用した指導方法を考える会を定期的に開催しています。詳細については、下記の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】

国立国語研究所日本語教育センター日本語教育教材開発室

担当：福永由佳 (ynonami@kokken.go.jp) 植木正裕 (ueki@kokken.go.jp) 電話 03-5993-7661 (直通)



事業の新展開

日本語教育研修の新たな展開

日本語教育センター 日本語教育研修室 石井 恵理子

国立国語研究所では、昭和42年の日本語教育センター設置以来、日本語教師に対する各種の研修を実施してきましたが、その間、社会状況の変化に伴い日本語教育のあり方はたいへん大きく変わりました。

日本語を学ぶ学習者の急激な増加と多様化によって、日本語教育は新たな教育内容と方法の検討を迫られてきました。日本語学習の場はもはや学校に限るものではなく、地域社会の中に多様な形で存在するなど、日本語を学ぶ場も多様化しています。教える側も、専門家あるいは職業人としての教師ばかりではなく、多くの一般の人々が日本語学習を支えています。日本語を教えるということの意味も、教師の役割や問題意識も非常に多様なものになってきています。

こうした状況を踏まえ、国立国語研究所では平成13年4月から独立行政法人へと組織が生まれ変わるのを機に、現職日本語教師に対する研修を3つの柱を立てた新しい枠組みで展開していきます。

1. 短期研修

1つ目の柱は、テーマ別の研修です。各教育現場の多様な問題を考える切り口としてさまざまなテーマを設定し、そのテーマに関する講義等によって知識や情報を得たり、問題意識を共有する教師間で意見・情報交換を行う場を提供する短期集中の研修です。より多くの方の参加が可能なように、週末の1日あるいは2日での研修会を東京および各地域で開催します。また、夏季には集中的に1つのテーマについて取り組む5日間程度のワークショップ形式の研修を予定しています。

2. 長期研修

2つ目は、日本語教育のリーダーとなりうる人材の育成を目指した研修です。自分自身の直面している問題の解決に向けた取り組みを核として、より広い視野で積極的に他者との連携を進めていく力を1年間の研修を通して身に付けることを目標とします。教育の改善は、教師個人を核としながらも、教師同士の連携はもちろん、学習者に関わるさまざまな立場の人々への働きかけによって学習者を取り巻く環境全体の問題として取り組んでいくべきものです。教育内容や方法を追究していく基盤は、日本語教育実践に基づく日本語教育学の確立と、日本語学、言語学、教育学、心理学、社会学等々他の学問領域との連携によって築かれるものです。また、社会的活動としての日本語教育は、教室の中で完結するものではなく、行政や地域コミュニティー等社会のさまざまな側面との関係によって成り立っています。教師個々の専門性の向上と同時に、他者、他領域に向けての発信と連携の姿勢が日本語教育全体の発展につながるものと考え、研修の目標とするものです。

3. 遠隔研修

3つ目の柱として、インターネットなどの通信手段を活用することによって、現場を離れずに参加できる研修を行います。研究会や講演会などの機会は首都圏など大都市圏に集中しており、それ以外の地域では研修の機会がなかなか得られない状況にあります。また、研修会の日時にあわせて時間がとれないという教師も少なくないようです。インターネットなどの活用によって、国立国語研究所との距離や時間の制約が解消され日本語教育関係情報や資料が利用できるようになるばかりではなく、遠くはなれた教育機関や教師同士が容易につながることができます。例えばお互いの教材を使って見て検討し合うことや、意見や情報を交換し合うことが可能です。参加者相互の知識や経験、教材等を共有し合える教師同士のネットワークは、より現場に即した教師の力になるものと考えます。

このほか、国立国語研究所では、文部省から海外の中等教育機関に日本語教師として派遣される教員を対象とした派遣前研修を実施する予定です。

それぞれの研修についての詳細は、国立国語研究所のホームページ(<http://www.kokken.go.jp>)に掲載する予定ですので、そちらをご覧ください。



〔研修の1コマ〕

終了報告

ことばフォーラム

「日本語を学ぶ・日本語で暮らす」

平成12年11月11日（土）国立国語研究所

今回のことばフォーラムでは、「分科会方式」という新しい試みに挑戦してみることにいたしました。ただ話を聞くだけではなく、参加者の方が自分で考えたことを積極的に発言できるように、全体を3つの小グループに分け、グループごとに設定したテーマにそって話し合いを進める、という形式です。

メインテーマは「日本語を学ぶ・日本語で暮らす」。最近日本でも、日本語を母語とする人としらない人、また日本語を母語としらない人同士が付き合い話し合う、という機会がめずらしくなくなってきました。文化的・言語的な背景が違う人同士が良好な人間関係を築いていくためには、まず相手の考え方・振舞い方をよく観察し、理解する必要があるのと同じく、自分自身の文化や言語についても改めて考え直すことが必要です。

そのための手がかりとして3つの小テーマを用意し、それについてグループごとに話し合いを進めました。

各グループでは、以下のようなことをおこないました。

1) 『ことばの分析』を体験しよう」

担当：井上 優 ほか

ここでは、「のだ（んだ、んです）」を用いた文と用いない文の意味の違い（例えば、「私はカレーが好きです」と「私はカレーが好きなんです」、「中国のお酒っておいしいねえ」と「中国のお酒っておいしいんだねえ」）について、さまざまな角度から話し合いました。「のだ」の意味分析の入り口のところを少しのぞいただけでしたが、様々な意見が出され、「のだ」の奥深さをあらためて認識しました。



2) 「映像を使ってできること」

担当：能波 由佳 ほか

国立国語研究所作成の『日本語教育映像教材 初級編 日本語でだいじょうぶ』を見ながら、この映像教材を使っていったい何が教えられるかについて話し合いました。同じ映像であっても見る人によってかなり違う情報を受け取っており、その解釈もいろいろであるということが体験できました。教育に映像を使うむずかしさ、おもしろさが浮き彫りになりました。

3) 「異なる文化・言語と出会ったら」

担当：石井 恵理子 ほか

「雑巾」ってなに？「燃えるゴミ」ってなに？という、ごく常識的なことを聞いているように思われる問いでも、生まれ育った文化が違うと答えもかなり違ってきてしまいます。実は日本人同士の間にも少なからぬ違いがありました。いろんな文化背景を持つ人同士が一緒に語り合い、お互いの違いを改めて認識するとともに、このように違う人々同士がよりよくコミュニケーションをおこなうための工夫について考えました。

「分科会形式」という新しい試みは好評のようでした。参加者のみなさんからは、言いたいことがたくさん言えてよかった、いろんな人のさまざまな意見が聞けてよかった、という感想が寄せられました。



データベース紹介

研究文献目録—ふたつの『年鑑』

国立国語研究所では、日本語の研究・教育に有用な研究文献情報を収集採録した『年鑑』という形態での2種類の刊行物をもっています。『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』です。

『国語年鑑』は、「ことばに関するあらゆる意見や研究や声を記録、整理して、問題を解決し、ことばの生活を進展させる基礎材料としたい」(初代所長・西尾実の「刊行のことば」より)ということから、1954年に創刊され、以降40年以上続いています。付加的な情報の提示は時代によって若干異なりますが、中心は国語・日本語に関する研究書や論文などの文献情報の収録にあります。

最新の『国語年鑑 2000年版』(2000年12月発行)には、国内外の日本語研究関係の図書1,503件、雑誌論文3,222件の情報が掲載されており、それらがジャンルによって細かく分類されているので、自分の知りたい分野についての情報を効率的に得ることができます。また、国語関係者や関係団体の名簿も収められているので重宝されています。

毎年生産される国語・日本語研究論文や研究書の数は非常に多く、年々増加しています。現在の『国語年鑑』には、国語教育や日本語教育関係の文献も採録されていますが、その範囲は学術的研究に関するものであり、言語教育の世界独自の実践的研究やテキストの類は対象となっていません。これらの情報を加えると膨大なものとなり、手に余るからです。

日本語教育の世界が拡大するに伴い、日本語教育関係の研究文献目録を求める声が大きくなってきました。そこで、国立国語研究所の日本語教育センターでは、1980年に『日本語教育学会誌・機関誌掲載論文等文献一覧』を内部資料として作成しました。以降、毎年刊行し続けてきましたが、2000年6月、広範囲の方々に使ってもらえるように『日本語教育年鑑』という形で公刊しました。

『日本語教育年鑑 2000年版』は「日本語教育の世界の実状を示し、日本語教育に関わる様々な情報の交流の基盤となることを目指すもの」(甲斐所長の「創刊のことば」より)として、日本語教育関係の書物や論文や研究成果などの情報や、国の政策、関係機関の動きなどをまとめたものです。収録した図書391件、論文1,328件です。これらは、ジャンルごとにまとめられ、ひとつひとつの文献にキーワードや章立てが付いているので、知りたい情報にたどり着くことができ、また全体的な内容を容易に把握することができます。

2冊の『年鑑』は図書館、研究室はもとより、個人においても有用なものです。お手元に置きご活用いただければ幸いです。



『国語年鑑 2000年版』 7600円+税
大日本図書 電話 03-3561-8678



『日本語教育年鑑 2000年版』 4200円+税
くろしお出版 電話 03-5684-3389

この2つの文献目録は、書物という形態での『年鑑』の他に、電子情報としてホームページ上でも見るできるようになっています。それぞれのアドレスは次のようです。

<http://www.kokken.go.jp/public/act-index.html>
<http://202.245.103.41:591/>

終了報告

データベース2000 東京 紀伊國屋書店主催セミナー

演 題：海外向けの日本語データ検索システムと漢字学習システムについて

発表者：横山詔一，エリック・ロング，江川 清，笹原宏之，谷本玲大

平成12年10月20日(金)

東京国際フォーラム(千代田区有楽町)

データベースに関する国内最大のイベントにおいて国立国語研究所の研究成果を分かりやすく解説するセミナーが開催されました。セミナーの前半では『現代雑誌九十種の用語用字：全語彙・表記』(国立国語研究所言語処理データ集No.7, 1996, 三省堂)を海外のWWWブラウザ(いわゆるホームページ閲覧ソフト)からも簡単に検索できるシステムをデモンストレーションしました。現在のところ、海外の一般的なWWWブラウザは日本語を簡便・迅速に表示することが残念ながらできません。このような壁を突き崩す一つの新しい方法として、インターネット回線の状態が安定していさえすれば常に世界中の一般的なWWWブラウザから日本語データベースを検索可能で、かつ軽快な動作のシステムを提案しました。さらにセミナーの後半では、上で述べたシステムを使ってインターネット上で動く漢字学習教材のデモンストレーションを行いました。

当日の参加者の大部分は、企業・官庁・図書館の関係者でした。ビール会社、石油会社、鉄道会社、証券会社など国立国語研究所と普段は接点のない分野の関係者が多く、日本語の国際化に対する社会的関心の高さを示しているようでした。



終了報告

第8回 国立国語研究所国際シンポジウム専門部会 「自発音声韻律ラベリングワークショップ」

平成12年11月14日(火)・15日(水) 国立国語研究所

従来の音声研究では、朗読調の整った音声の研究の主対象とされてきましたが、最近では我々が日常自然に話しているような自発性の高い音声も分析されるようになってきました。日常音声は多様性に富んでおり、従来の手法では捉えきれない面がたくさんあります。今回とりあげた韻律もその一つです。ワークショップの目的は、韻律のラベリング手法であるJ_ToBIを自発性の高い自然な音声に適用する際に生じる問題を整理し、解決策を探ることです。参加者には5分程度の音声を現行のJ_ToBIマニュアルに従ってラベリングしていただくという、宿題付きのワークショップです。(表紙写真参照)

初日は現マニュアルの著者であるベンディッティ氏(ラトガース大学)の講演に続き、参加者から提出された宿題の分析結果講演の報告が行われました。二日目は宿題を行う際に直面した問題について参加者から報告していただいた後、今後の方策について討議を進めました。48名にのぼる参加者から活発な意見表明があり、全体として大変に活気のある意見交換の場となりました。このワークショップの成果を生かしたマニュアルの作成を決め閉会となりました。



二千元札の裏面の文章について

質問

Q

- 二千元札の裏面の文章にはどのような内容が書かれてあるのですか。また、絵とはどのような関係があるのですか。

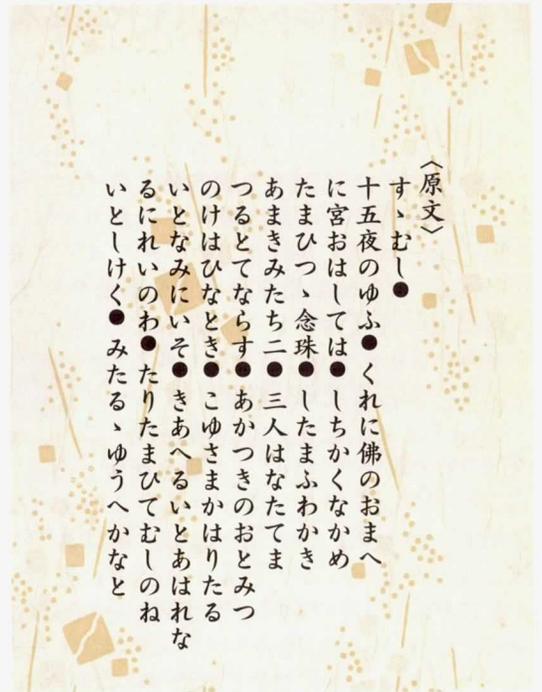
回答

A

- 文章は、国宝の『源氏物語絵巻』第三十八帖「鈴虫」の「詞書き（ことばがき）」です。詞書きというのは、絵巻物や絵本などの絵の前後や絵の中などに書かれた文章のことです。『源氏物語絵巻』の場合は、まず詞書きがあってその後に絵が続きます。その詞書きは『源氏物語』から、絵に関係のある部分を抜き出したものですので、文章自体はほとんど『源氏物語』と同じです。

右に、原文と口語訳をあげておきました。なお、二千元札の裏面の本文には、この原文がすべて載っているわけではなく、●を入れてあるところから上だけしか印刷されていません。ですから、二千元札の本文だけを読んでも意味は通らないのです。

内容は、仏門に入った女三の宮が読経をしているところに、五十歳になった源氏が遊びに来た場面が書かれています。このあと、夕霧や虫兵部卿も訪れてきて管弦の宴となります。そこへ源氏の息子である冷泉院から誘いの使いがきて、源氏は若い公達を引き連れて参上し、月見の宴をあらためて開くこととなります。二千元札の裏面の絵は、その月見の宴を描いたものです。絵では、源氏と冷泉院が向かい合って何かお話をしていますが、実際は、手前の方に若い公達が四人、管弦に興じている場面も描かれています。(翻字・口語訳とも 伊藤雅光)



〈原文〉

すゝむし
十五夜のゆふ●くれに佛のおまへ
に宮おはしては●しちかくな
たまひつゝ念珠●したまふわか
あまきみたち二●三人はなたてま
つるとてならず●あかつきのおとみつ
のけはひなとき●こゆさまかはりたる
いとなみにいそ●きあへるいとあはれな
るにれいのわ●たりたまひてむしのね
いとしけく●みたる、ゆうへかなと

〈口語訳〉

八月十五夜の夕暮れに、仏のお前に女三の宮がおいでになって、そこに近い廂（ひさし）の間から、お庭のどこを御覧になるともなく、お眺めになりながら、お心には仏を念じられ、お口には経文をお唱えになる。若い尼君たちが、二三人、仏に花を差し上げようということで、閻伽坏（あかつき）という器を鳴らす音や、その器に水を入れる音などが聞こえてくる。世俗にいたるところとは様子が違う仕事にお互い急いでいるのを思うと、強く胸を打つものがあるのだが、そこへ、いつものように六条院、すなわち源氏の君がお越しになって、「虫の音が本当にひどく鳴き乱れる夕べですね」と、

終了報告

第8回 国立国語研究所国際シンポジウム専門部会 「東アジアにおける日本語観国際センサス」

平成12年9月20日(水) 国立国語研究所

国立国語研究所は、外国人から見た日本語観についての調査、「日本語観国際センサス」を行ってまいりましたが、その成果をもとに9月20日(水)、日本、韓国、中国、シンガポールの研究者による国際シンポジウムを開催しました。各国の研究者による日本語・日本語教育事情に関する研究報告の後、「日本語観の現在・未来」と題するパネルディスカッションが行われました。

国際化が進む東アジア地域では、様々なイメージを持たれながらも日本語が第二外国語としての地位を確立しつつあります。相互交流の機会が増え、日本人との接触様態が変化するにつれ、日本語がどのように意識され、今後どんな方向に変容していくのかという点について、各国の研究者とフロアの間で活発な討論が繰り返されました。

このシンポジウムの内容は、国語研報告として刊行される予定になっています。